

狼煙から無線電信へ

JJ1SXA/池

狼煙、これは古代からある意思伝達の手手段だ、敵軍の発見を友軍に通知するシグナルとして全世界的に使用されていたようだ。

のろしを狼の煙と書くのは、乾燥させた狼の糞を燃やしたからである、肉食獣の狼などの動物の糞は硝酸塩を含み、燃焼の際に生じる煙が風のある時でも真っ直ぐに立ち上りやすいためのだ。

日本では、「日本書紀」に記述があることから既に奈良時代には狼煙が利用されていたことがわかっているとのこと、「日本書紀」の巻第27「天命開別天皇 天智天皇」の項目に、「於対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等、置防与烽」という記述があります、「烽火(とぶひ)」というのが狼煙のことで、古来はこの名が使われていた。

「対馬・壱岐島・筑紫の国などに、防人と烽火を備えた」という内容、664年のことですが、どの地も西の国境にあたる地域です、対馬や筑紫などは朝鮮半島や中国と一番近い場所であり、ここに狼煙台を設置して防人を置いて入寇に備えたのです、火急の知らせを中央に伝える仕組みとして機能していたのだ。

古代に、西の国境にあたる地域に防人を置き、狼煙台を設置して外敵の侵入に備え、火急の知らせを中央に伝える仕組みを設置していたが、現代の日本では、近年ようやく、西の地域の防衛に気を使うようになったが、平和ボケの一部国民が自衛隊基地設置反対などと寝惚けたことを言っていた、尖閣諸島を我が物にと目論む中国に、訪中団の一員に加わり中国に赴いた沖縄県知事が、苦言の一言も無く、挙げ句はカチャーシーを披露だ、情けない話だが、そういう人を知事に祭り上げているのも沖縄県民で日本国民だ。

おっと脱線だ、政治的な話は禁物だった、狼煙の時代は大昔のこと、明治時代の日露戦争時、大部分の軍艦に無線機を備え、無線通信が戦争で重要な役割を果たすことを世界に知らしめた日本、無線機の発明からそんなに時を経ていない1904年のことだ。

それから37年後の1941年、それまでの日本の運命を大きく変えた太平洋戦争勃発、私の幼少期だ、「鬼畜米英」「神国日本」を叩き込まれたが、映画などで見るセーラー服の海軍水平さんが軍艦で、颯爽と振る手旗信号が恰好良く、無線室で電鍵を操作する電信兵の姿も今でも目に焼きついている、その後、桜に錨の7つボタンの予科練の制服を纏った先輩の姿に魂を奪われ、何が何でも、将来は予科練と誓ったが、数年で終戦、夢は叶わずだったが、未だに生き永らえているのが、本当に良かったかは疑問。

そんな事もあんな事もすっかり忘れて、仕事に追われる毎日の中、ふとしたきっかけで踏み込んだアマチュア無線の世界、そして電信の世界、狼煙の時代から幾星霜、無線電信は狼煙に比ぶべくも無いすごいコミュニケーション手段だったが今やガラパゴスの世界、そんな存在の電信の魅力に取り憑かれて、もう半世紀近く、下手の横好きなれど、好きなものは好き、然し、すっかりご無沙汰で、和文QSOどころか、欧文QSOも怪しい、生を終える時まで現役でいるために、もう少し電鍵を叩かねばと思う次第で、何年ぶりかで「エスカルゴコンテスト」に参戦し、本当に何年ぶりかで縦ぶれ電鍵を叩き、電信っていいなあ〜と再認識、もう大分以前からシニアだが、初めて、70歳以上のシニア部門にログ提出。

(2023年8月記)